中世のラテン語叙事詩 "Waltharius" の翻訳並びに研究（Ⅱ）

丑　田　弘　忍

第一部　翻　訳（つづき）

だが三人の死者の姿は狂気のグンタリウスを恐れさせなかった。死に急ぐようにと，彼は再び命じた。見よ，サクソニア生れのエキウリドが四人目に戦いを試みた。彼はある高貴な人を殺害したために国許から逃れていた。この男をまだらのある褐色の馬が運んだ。今や彼はウァルタリウスが戦いの準備をしているのを見るや否や，「手応えのある五体が貴様に生気を与えているのか，それとも，いまいましい奴よ，気体のしかけによって，貴様は形作られているのか。まさしく貴様は山野に馴れている山の神とわしには思える。」かの男（ウァルタリウス）は誇らしげに声高に笑ってこう答えた。「わからぬ言葉からお前が，洒落が生れつき他の族よりも長じているあの族の出であることがわかる。しかしもしお前がより近くに迫り，わしの右手に触れるならば，今お前がウォサグスで山の精に会ったと，後にサクソネス人に語る事が出来よう。」「貴様が誰であるか，まさしくわしは（知る事を）試みよう。」とエキウリドは言って，そして直ちに鉄の槍を腹だたしげに投げた，この槍は（強い力をだすための）革ひも[3]で振り廻されて飛んだ。がその時堅固な楯の中高がそれを打ちくだいた。(772)

(1) Celtica lingua 本来の意味はケルトの言葉，ここでは Strecker の注に従った。

(2) Amentum 槍の中程にくくりつけられて，投げる際に反動をつける。

ウァルタリウスはこれに対して槍を投げて答えた，「森の精がこの土産物をお前に渡そう。今やわしのこの槍が突き通るかどうかを見るがよい。」この槍は牛皮で張られた木楯を割り，そして鎧を引き裂き肺に留まった。

哀れなエキウリドは倒れ，そして血の流れを吐いた。見よ，彼は逃れようとした死の中へと突き進んだ。若者（ウァルタリウス）はこの男の馬を自分の背後の草（地）へと引いていった。(780)

それから五人目の男ハダウァルドゥスは怒りの心で惑わされて，自らには敵の栄をくれるように，グンタリウスに求めた。この男が赴いた時，大胆に，意気高くただ剣にのみ頼り，仲間に槍を預けた。そして倒れた死体が道中をふさいでいて，馬を進ませることが出来ないのを，彼が認めた時，（馬より）飛び降り，徒歩（かち）で赴くことに覚悟を決めた。ウァルタリウスは武具を帯びて勇んで構えており，そして尋常な勝負を挑んだこの男を賞めた。そこでハダウァルドゥスはウァルタリウスに言った，「おお，狡猾に奸計と欺瞞に長ける蛇よ，鱗をもつ皮に肢体を隠すことに慣れており，毒蛇の如くとぐろを巻いて，貴様は槍の少しの打撃も受けることなく多くの投槍を避け，そして習いにそむき毒矢をもてあそぶことか！（貴様の）かなり近くに立っている者の右手が確実に狙いを定めて投げるこの一撃から一体貴様は詭計でもって逃れると考えているのか？（しかし）その者は武器や手傷をもたらすものではない。（わしの）忠告を聞くがよい。色彩られた楯を下に置くがよい。その楯はわしの分け前分になっている。王の約束も亦請け合っておる。その楯は（わしに）気に入っているが故に，貴様が壊すことをたしかにわしは欲しない。もし貴様がわしから実り豊かな（生命の）光を奪うなら，ここで（わしの）仲間と血縁の多くが加勢するものぞ，たとえ貴様が鳥になり，そして飛ぶ羽根を望んでみても，やはり彼等は，貴様が（戦いから）無事に立ち去るのを許さないであろう。」(804)

しかし勇敢な男（ウァルタリウス）はこれに対して驚かずかく語った，「ほかの事ならわしは黙っていようが，楯を守る事には力を尽す。わしの言葉を信じよ，（わしの）手柄にはわしはあの楯に恩を受けておる。楯はしばしばわしの敵どもに身を投げるのを常とし，そしてわしが傷（を受ける）かわりに（自ら）傷を受けた。今日これがどれだけわしの役に立っているか，貴様自らが気づいている。もし楯がないならば，貴様はウァルタリウスと語ってはいないであろう。おお，（わが）右手よ，奴がお前の守

りの（楯）を奪いとらぬように，あらんかぎりの力をふるって敵を追い返すように努めるがよい！（わが）左手よ，お前は楯の取手をしっかり掴んでいるように心がけよ，そして象牙（の取手）を膠（にかわ）の如くに動かぬ指で握りしめよ！　お前はまさにはるかなるアウァレス人の国から長い道のりを運んで来た重荷をここで降ろしてはならぬ！」(817)

これに対してかの（ハダウァルドウスは言った），「貴様がことさら拒むかぎり，貴様はいやいやながらも行うであろう。楯のみならず，馬と女子，そして黄金をも手放すであろう。その時初めて貴様は犯した罪の罰を受けるものぞ。」彼はこう言って，よく知られたる剣を鞘からぬいた。地上の異なった土地に生れたる（二人は）互いをめがけて疾駆した。ウォサグス（の森）はこの激突に肝をつぶした。両者は意気とみごとな武具で丈高く，かの者（ハダウァルドウス）は剣に信を置き，この者（ウァルタリウス）は激しく，かつ高く槍を（構えて），彼らは互いに全力を尽して闘いを交えた。兜の鳴り響き，楯のこだまする音ほどには，黒い柏の木も斧で切り倒されて音をたてる事はない。フランキア人は，勇者ウァルタウリスが疲れてこないのに，驚いた。彼にはいかなる休息も与えられてはいなかった。この時，今やウォルマチア人（ハダウァルドウス）は危険なしと考え，疾駆し，体を伸ばし，怒りに燃えて両刃の剣を高く（振り上げた），この一撃で闘いを終らせん事を想って。しかし若者はこの一撃を，かざした槍の穂先で慎重にかわし，そしてこのうかつな男からやむなく鉄の（剣）を飛ばせた。近からぬ茂みの中でこの剣は光った。かの（ハダウァルドウスは）気にいりの剣が奪われたのを見た時，急いで逃げ，そして茂みに近づこうと欲した。アルペレの子（ウァルタリウス）は（おのが）足と溌剌たる若さをあてにして，（かの男に）追いすがり，言った，「貴様は一体どこへ逃れるのか？　楯を取るがよい！」こう言って，両の手で素早く槍を振り上げ，（相手に）一撃を加えた。かの男は倒れ，（その上）に大きな楯は（落ちて）鳴りわたった。若者（ウァルタリウス）はためらわなかった。足で（かの男）の首を抑えつけ，楯を押しのけ，槍でこの男を地に届くまで突き刺した。かの男は目をむき出し，息を大気に吹きかけた。(845)

六番目はパタウリドであった。彼をハガノの実の姉が光へと出していた。[1] 伯父（ハガノ）はパタウリドが進み出るのを見た時，どなったり，願ったりして（彼を）引き戻らせようと試みた，「一体お前はどこへ急ぐのか？　死の事を考えよ，彼がいかにあざわらうかを考えよ！　留まれ！見よ，パルカエ[2] は命の最後の糸を紡いでおる。いとしい甥よ，お前の心はお前を眩ませておる。留まれ，お前はウァルタリウスの力量と比べものにならぬ。」しかしこの哀れな男は赴き，これら総てを無視した。実に彼は誉れを得んことを願って彼の血管はたぎった。ハガノは心を暗くし，胸（の底）より深い吐息をついた，そして心の奥底からこう言葉を投げかけた，「おお，世の渦，飽くことのない所有欲，貪欲の奈落，あらゆる悪の根！　おお，おぞましき者よ，人間には手をつけずに，願くば単なる黄金のみを，そして他の宝をも飲みこまんことを！　だがおん身は今やよこしまな意により人間をあおりたてる。もはや誰も自分のものに満足しない。彼らは儲けのためなら恥ずべき死に赴くことをためらわぬ。彼らは多くを得れば得るほど，所有の欲望は燃え立つ。彼らはある時には力づくで，ある時にはひそかに他人の物を手に入れる。そして一層悲しみを新たにし，涙を誘うであろう，彼らが天来の魂をエレブス[3] のかまどへと押しやることは。見よ，わしはいとしい甥を呼び戻すことが出来ない。なぜならばおん身によってそそのかされているから，おお，恐ろしい欲望よ。見よ，彼は目が眩んで，いまわしい死を味わうために急ぎ，そして空しい誉れのために，闇の国へ降りることを願っている。ああ，わしのいとしい甥よ，分別なき者よ，お前は（お前の）母に何を言い残すのか？　いとしい者よ，この間（お前と）一緒になった妻を誰が元気づけるだろう？　お前は彼女から希望を奪って，彼女に子供を持つ楽しみを与えなかった。一体いかなる狂気がお前を捉えているのか？　どこからこの狂気はやって来たのか？」彼はこう言って，わきあがる涙で胸元を濡らし，「さらば，いとしい者よ」と，しゃくりあげながらかなたへ向かって言った。(877)

(1) Protulit ad lucem の直訳，生んだ事

(2) Parcae 運命の神

(3) Erebus 冥界の事，闇の神

ウァルタリウスは，遠くからであるとはいえ，仲間（ハガノ）が悲しみに満ちているのを心に留めた。そして同時に嘆きの声が（ウァルタリウスの）耳に達した。それ故ウァルタリウスは疾駆してくる騎士(パタウリド)にこう呼びかけた，「聰明なる若者よ，わしらの忠告を聞くがよい。そして命を保ち，よりよき運命を享受するがよい。留まれ，つまるところそなたの強い確信がそなたを惑わしておる。かくも多くの勇士の屍を見るがよい，そなたが死を見ず，わしの敵をこれ以上多く作らないために，戦いから退くがよい。」かの男（パタウリド）は言った，「残忍な者よ，わしの死について貴様が何を煩うのか？　ほざくのはやめにして，戦うことのみを貴様はすべきだ。」彼は言った，そしてこう語ると共に，節くれだった槍を投げた。これを勇者はおのが楯で脇へそらした。その槍は風に靡(なび)き，そしてこの怒れる男の力にまかされてあの谷へ飛んだ，そして乙女の足下に突き刺った。彼女は，恐れに捉われ，悲鳴をあげた。しかし（彼女の）血がかすかに心臓に戻った時，わずかに目を上げ，勇者が生きているかどうか，見遣った。(894)

その時なお勇敢な男（ウァルタリウス）はこのフランキア人に，戦いから手を引くようにと，うながした。しかしこの男は怒り狂い，剣を抜き，ウァルタリウスめがけて疾駆し，襲いかかり，頭上より一撃を振り下ろした。アルペレの子（ウァルタリウス）はまさしく楯をたくみに振り上げていた，そして泡をふく野猪の如くに黙したままで歯ぎしりをした。かの男（パタウリド）は（相手を）打つことを欲し，一撃を（加えん）がため，全（身）を前方にのりだした。しかしウァルタリウスは身を曲げて，楯の下に隠れ，体をこわばらせた。そして見よ，若者はこの一撃によって惑わされ，愚かにも（地に）落ちた。この騎士が膝をぴったりと地面につけ，そして楯の下で剣から身を護っていなかったなら，彼は果てていたであろう。この者（ウァルタリウス）が立ち上がる間，かの者（パタウリド）も同じく立ち上がり，そして心落着かずに素早く楯を前へかざした。そして戦いを再び行おうと身構えたが無駄であった。しかしアルベレの子は速や

かに槍を（地に）突き刺しておいて，剣でもって相手を打った。そして楯の半分を力強い一撃でたたき落とし，鎖鎧を突き破り，臓物をむき出させた。哀れなパタウリドはおのがはらわたを見ながら，倒れ伏し，肉体を森の獣に，魂を冥土 (1) に与えた。(913)

(1) Orcus

ゲルウィトウスがこの男のために復讐を誓って赴いた，このゲルウィトウスは，力強き馬に乗り進んで，細径をふさいで横たわっているすべての屍の上を飛び越えた。戦いに強き男（ウァルタリウス）が倒れ伏している者の首を切り取っている間，ゲルウィトウスは近寄り，両刃の斧を，顔をめがけて振りかざした——その頃のフランキア人の武器はそのようなものであった——勇者（ウァルタリウス）は素早く楯を前にかざし，この一撃を無駄にさせた。そして後へ飛びのき，愛好の槍を掴んだ。そして血にまみれた剣を緑の葦の中へ投げ入れた。(922)

実にそれからここで勇士たちの恐ろしい戦いが見られたであろう。まさしくマルス (1) の槍の下ではいかなる言葉も交わされなかった。このように彼らは精神を一騎打ちの戦いに集中させた。その者（ゲルウィトウス）は，復讐によって同胞の死が贖われるようにといきり立っていた。かの者（ウァルタリウス）は全力を尽して生命を守ることに，そしてもし運命が与えてくれるならば，勝利の名誉を握ることに懸命であった。ゲルウィトウスが打ちかかるとウァルタリウスは防ぐ。この者が襲いかかると，かの者は退く。運と力とが一つの励みに交ざりあった。しかし長い槍はより短い槍を携えている敵を追いやった。だがかの者は（おのが）馬をぐるぐる廻し，そして疲れた男を惑わさん事を願った。(933)

(1) Mars 戦いの神

今やますますウァルタリウスは大いなる怒りに耐えかねて，ゲルウィトウスの楯を下から払いのけた，そして鉄（の槍）は（ゲルウィトウス）の太ももを突き通り，付け根に達した。彼は後ろざまにひっくり返り，恐ろしい叫び声をあげ，そして（おのが）破滅を嘆きながら，踵で地を蹴った。ウァルタリウスはまたもや，この男の首を切り取り，胴を横たえた。

この男はかってはウォルマチアの地で伯爵に任ぜられていた。(940)

たまたまフランキア人はここで初めてためらい始め，そして戦いから手を引くように，切なる願いをこめて王に乞うた。（しかし）かの哀れなる者は逆上し，目が眩み言った，「わしは願う，猛き武士ども，そしてしばしば試された心（の者たち）よ，この不幸がお前たちに恐れでなく，怒りをもたらさんことを（わしは願う。）わしがかように誉れを失ってウォサグスから戻れるものか？　皆の者がわしの考えをわがものとするがよい。見よ，わしはかような所業でウォルマチアへ立ち戻るよりも，むしろ死ぬ覚悟をしておる。かの者（ウァルタリウス）を勝者として血を流さずに祖国へ帰らせてよいものか？　今まではお前たちは，あの男から宝を奪うことのみに燃え立っていた。武士ども，今や流された血を償うことに燃えたて，死が死を，血も亦血を贖うように，そして人殺し（ウァルタリウス）の破滅が仲間の死を償うように！」(953)

この狂える男はこう言って（総ての者の）心を燃えたたせた。そして生命と共に安寧をも総て忘れさせた。そしてさながら馬上試合の如く，銘々が他の者に先がけて死に急ぐのに懸命であった。しかし，私が前に語ったように，細径が，ただ二人のみで闘いの勝負が決せられる事を強いた。だが誉れ高き勇者（ウァルタリウス）は，彼らがためらっているのを見た時，頭から兜をとり，木に掛けた。そして風に（身体を）さらし，喘ぎながら汗をぬぐった。(961)

見よ，思いがけなくも，戦士ランドルフが他の者に先んじて馬で近づき，向う見ずにウァルタリスにとびかかった。そして直ちに胸の下を鉄の棒で打った。ウィエランドウスが鍛えぬいて作った環（鎧）[1] が妨げていなかったら，（彼の）下腹は太い槍で貫ぬかれていたであろう。(966)

(1)　アッテイラ王から奪った例の鎧，ウィエランドウスは鍛冶職人の名。

しかしかの者（ウァルリタウス）はふいに驚かされ，楯を構え，勇気を再びふるい起した。しかし兜を手に取る機会はなかった。しかしフランキア人（ランドルフ）は槍を投げ，剣を抜いた，そして一撃を加えてアクィタニア人（ウァルタリウス）の頭から二本の髪を切り取った，がしかし頭の

皮に触れることはたまたま出来なかった。そして再び二度目の一撃をふりかざした。そして血気に逸って，前をふさいでいる楯にまっしぐらに剣を打ちあてた。しかしいかなる力をふるっても（剣を）はずしとる事は出来なかった。アルレペレの子は稲妻の如くに（ランドルフに）襲いかかり，大力を揮ってこのフランキア人を後へ，地へ倒した。そして傍に立って，（この者の）胸を足で踏みつけ，そして言った，「さあ，（貴様がわしの）頭の毛を切ったかわりに，わしは貴様の頭をもぎとってやるぞ，貴様の花嫁の前で，貴様がわしをやっつけたと自慢出来ないように。」こう言うや否や，乞い願う者の首を切り落した。(981)

しかし九番目にヘルムノドが闘いに赴いた，そして三重により合された綱の付いた三叉（みつまた）の（槍）を携えた。その綱を彼の背後にいる仲間たちが握った。それは戦術であった，つまり槍が投げられて，楯に突き刺った時には，狂える男（ウァルタリウス）を倒すように，直ちに総ての者が(綱を)引っ張るよう努めるのである。そして彼らはこの望みを抱いて，確かな勝利を期待した。遅滞なく，将帥（ヘルムノド）は全力を腕にそそぎ，大声で呼ばわりながら敵に三叉の（槍）を投げた，「はげ頭よ，この鉄（の槍）で貴様は終りだ！」槍は風を切り，どんな障害にも打ち勝つため，高い木から強くとぐろを巻いて落ちる蛇の一種の如くに飛んだ。何を私はためらうのか？　槍は楯の中高に突き刺り，楯に留った。フランキア人たちは歓声をあげ，森はこだました。彼らは足をふんばって綱を引っ張った。そして同時に代りあって（引っ張った。）王はかような労をとる事に惑わなかった。総ての者の肢体から汗のしずくが流れおちた。だがしかし勇者（ウァルタリウス）は，この間，風のいかなるざわめきをもみじろぎせずに侮り，根が地獄[1]にまで伸びているほどに梢は天を摩している樫の木の如く構えていた。もしウァルタリウスを地へ倒すことが出来ないならば，少くとも守りの楯を奪いとるようにと，敵どもは競いあって（綱を引き）そしてお互いに励ましあった，楯が取り去られれば，彼は容易に生き身で彼らによって捕えられるであろうと。(1006)

(1) Tartara

今や私は残って（網を）引っ張っている者の名を挙げるであろう。九番目はエレウティルであった。あだ名はヘルムノドと呼ばわれた。十番目にはトログスという男をアルゲントラトウム[1]の町が派遣していた。十一番目のタナストウスを力強きスピア[2]の町が送っていた。十二番目の位置をハガノではなく王が占めた。この四人が一人の相手に対してあらゆる力をふりしぼり，同時に多くのそして様々な喚声をあげて戦った。(1013)

(1) Argentoratum 現在のストラスブール

(2) Spira 現在の西ドイツ南西部のシュパイエル

しかし無駄な骨折りがアルペレの子を怒らせた。そしてすでにしばらく前より額から兜をはずしていた彼は，剣と青銅の鎧に信を置き，楯を放棄し，まずエレウティルに向かって突進した。彼はエレウティルの兜を割り，脳を飛び散らせ，首を切り落とし，胸を切り開いた。しかし傷ついた心臓は脈打ちながら直ちに（生命の）気息と熱気を失った。(1020)

それからウァルタリウスは呪わしい網につかまっているトログスめがけて襲いかかった。そしてこの者(トログス)は襲われた友の死にざまと敵の恐ろしい姿に狼狽して，急いで逃れようとむなしい試みを始め，そして再び闘いを行わんがため，手放していた武器を再び手にせん事を欲した——なぜならば総ての者は，網を引っ張るため，槍と楯を（地に）置いていたからである——しかし猛き勇者がより大なる勇気にあふれれば，それだけ一層かの男よりも早かった。彼は走って（かの男に）追いつき，剣で（彼の）ふくらはぎに切りつけた。そしてかように力を失なった者に先んじて，彼の楯を奪い去った。しかしトログスは傷によって萎えていたにもかかわらず，やはり心を燃えたたせ，大石を探し求めた。これを彼は素早く掴み上げ，身構えている敵（ウァルタリウス）に向かって投げた。そして自分の物である楯を上から下まで打ちくだいた。しかし（楯の）上に張られた皮が砕かれた板を守った。それから直ちに，膝をつき，（剣の）緑の鞘を空にした。そして心を燃えたたせ，（剣を）振って宙を震撼させた。そしてたとえ所業によって勲功を示すことが出来なくとも，しかし心と口で勇敢な態度を表わした。死霊が笑いかけるのを見ずに，彼は大胆にも言

った，「おお，もし信のおける楯がせめてわしのそばにあれば！　名だたる武勇ではなく，幸運が貴様にわしに対する勝利をもたらしたのだ。今や楯に加えて，わしの剣を取りあげるがよい。」(1043)

そのとき勇者も亦，笑いながら，「わしはすぐに行くぞ。」と言った。そして急ぎ走り，打ちかかる相手の右手を切り落した。しかし勇者が二度目の一撃を耳より振り下し，そして死にゆく者の魂に（死）の扉を開くように努めた時，見よ，タナストウスが王と共に武具を再び手にして近づき，楯を投げて，友を（相手の）一撃から守った。それでウァルタリウスは逆上し，タナストウスに対して怒りを向けた。そして彼の肩を関節から引き抜いた，そして脇腹を鉄（の槍）で貫ぬいてはらわたを下へはみ出させた。「さらば」とタナストウスは倒れ伏しながらつぶやいた。トログスは（タナストウス）が倒れ伏した後，勇気のせいか，あるいは望みを失なったせいか，懇願することを侮り，辛辣な罵言によって勝利者（ウァルタリウス）を燃えあがらせた。そこでアルペレの子は言った，「死ね，そしてまさしく貴様が仲間のために復讐したと，地獄[1]に伝えて彼らに語れ。」こう言って黄金の鎖を首に巻いた。[2] 見よ，同時に斃れた友同志は，（血で）汚された地をしきりに踵で打ちながら，[3]（土）埃にまみれてころがった。(1061)

(1) Tartara

(2) ……torquem collo circumdedit aurem.　難解な個所である。諸学者によって以下の如くに解釈されている。(A)相手の首を切り落とした事。(B)鎖で相手を絞殺した事。(C)ウァルタリウスが勝利者として自らの首に鎖を巻いた事。ここでは(A)が最も適切な解釈と思われる。

(3) 最期の痙攣を指す。

哀れなる王はこれを見て溜め息をつき，全力で逃れ，（鞍を）飾った馬の背にまたがり，心暗くしているハガノのもとへ素早く急いだ。そして自分に伴なって赴き，戦いを再び起さんがため，あらゆる懇願でもってこの男を動かそうと懸命に努めた。しかしかの者（ハガノ）は（こう言った），「祖先の恥ずべき血筋が私を戦いから遠ざけます，そして（私の）無情の血は武器を取る気持を私から取り去りました。父は実に，武器を見れば，

萎えてしまい，そして怖れをなして，多くを喋って戦いをはねのけていました。王よ，この事を家来たちの間で言われたとき私の加勢はまさしくふさわしからざるものとなりました。」(1072)

かの（王）は（ハガノが）拒んだにもかかわらず，強く請いせがみ，こう語ることにより，このそっぽを向いている男を再び引き寄せる事にてこずった，「わしは神々にかけて（そちに）頼む，抱いた怒りを捨て去れ，わしの過ちにより引き起された怒りを取り除け。（わしの）生命があり，そちと共に家路につけば，多くの価値ある所業によって，そちにたいしてわしは過ちを拭おう。かくも多くの仲間と縁者が殺された上でも，勇士でないかの如く振舞う事を恥と思わないのか？　確かにわしには思えるのだが，言葉は不埒（ふらち）な行ないよりも（そちの）心を揺り動かす事が出来るようだ。今日ただ一人，この世の頭目の面目を汚した乱暴者（ウァルタリウス）に向かって（そちが）心から怒る方がより正しい事なのだ。勇者どもの死により，わしらは少なからぬ損失を蒙った。だがかくも大なる恥辱はフランキアの破滅のもととなるであろう。かってはわしらを恐れていた者がさげすんでかく言うであろう，『フランキア人の武将たちがただ一人の者に，誰とさえもわからぬ者に殺されて仇を討てぬとは，おお恥辱かな！』(1088)

ハガノは今なお迷っていた，彼はウァルタリウスにしばしば誓った信義を心中に抱いていた，そしてまさしく出来事の結末を次々と思い煩った。だが哀れなる王は彼に乞い迫った。懸命に懇願する王の激しさに動かされ，彼は主君の顔をまともに見る事が出来なかった。もしもかくの如き状況でとにかく戦おうとしないならば，おそらくこれにより汚すであろうおのれの武功の誉れの事を考えていた。ついに彼は声をあげ，そして高い声でこう答えた，「殿，あなたは私をどこへお呼びになるのですか？　名高き殿，どこへお伴したらいいのですか？　決して起り得ない事を（殿に対する）信頼が（私の）心に約束しています。開かれたる断崖を自ら進んで飛ぶ事を試みるほどの愚かな者は，かって誰がいたでありましょうか？　私は知っています。ウァルタリウスはこのような陣と場所に構えて大勢の

陣を一人の人間の如く軽蔑する如く，そのように平野においても激しく戦うことを。たとえここへフランキアが総ての騎士と，そして同時に歩兵を送ってきたとしても，彼はあの者たちと同じように扱ったでしょう。しかし戦いにおける敗北よりももっと恥辱によりあなたが苦しみ，そしてかように立ち去る事を欲しない事を，私が気づいていますので，私は（あなたに）同情いたします。そして私の苦しみは王の誉れに及びません。ここで助かる方策を見つける事を試みましょう。だがそれはどこにも生じないか，あるいはじきに生じましょう。なに故ならば，いとしい甥のために——殿，私はあなたに白状しましょう——私は約束された信義の掟を破る事を欲しないでしょう。見よ，王よ，私はあなたのために確実に危険へと進み入るでしょう。しかしここで全く私が戦いを避ける事を，お知りになるがよろしゅうございましょう。我々は退きましょう。そしてあの男に退く機会を与えましょう。そして待ち伏せ，広野で馬に草を食ませましょう，彼がすでに危険なく，我々が去ったと思い込み，狭い陣営を捨てるまで。彼が開けた野に踏み入れば，我々は立ち上がり，そして背後に廻って，うち驚いている者を襲いましょう。こうして我々は武功を試みる事が出来ましょう。これは私にとっては不確かな物事の中で疑いのない望みです。王よ，もしあなたに戦う気持があれば，その時戦う事が出来ます。もちろんあの男は決して我々二人を逃がしはしないでしょう。しかし我々は逃れるか，あるいは激しく戦わねばなりません。」王はこの計画を賞め，彼を抱擁し，くちづけでこの男を愛撫した。そこで彼らは退いていった。そして隠れるために充分にかなった場所を見回し，（馬から）降り，馬を豊かな草地に繋いだ。(1129)